朝夷巡嶋記

第六編

一

イ13
939
№26

曲亭主人著

朝夷巡嶋記編

歌川豊廣画　文金堂梓

丁亥發兌
三樂字號

門 13
939
12

朝夷巡島記第六編序

原平義秀事實東鑑所載不過於小壺角觝及妙戲海潮捕鯱鱷三隻事與建保血戰破門拉敵奮勇無前最後汎舟以走安房事也是以坊間冗籍唯神其勇力而不知其智術亦捷于世至甚者則云義秀身後於冥府威服閻羅奴僕冥官其言可以悅閻里小兒而不足爲士君子道也予嘗以謂義盛八子而義秀爲白眉渠其勇悍

非唐與漢樊噲為伯仲其智略亦將有似張子房何者彼敗軍中善脫難免而不使獻終身知其存亡當時苟以報怨雪恥之志則不與父兄俱死也宜惜乎時不至終漂泊海島而鴻雁之傳信焉者無矣是故不遇於北條氏以聘之辱則勝乎田横辭漢伏劍但以其事蹟無所攷識者為千載遺憾此予之所以戲著巡島記也初發研之際予約于書肆文金堂是書刊行至三十卷則可以結局也爾後六續編簡冊無五六然而腹稿未吐盡者幾過半矣光陰難追又費幾日焉書肆之不飽利以編述不速為恨予乃倦于筆研獨悔是著不易果彼我急寬莫奈之何敢思欲因前約輟筆於是編文金堂允之否未遑告是意本編五卷手稿成即便是為序

文政九年仲冬之日書于神田廟東著作堂南檐木犀花陰　簑笠漁隱

朝夷巡嶋記全傳後輯第六編總目録

第四十九條　諏訪嶺豺狼　照射山鷽鷯
第五十條　莊官林淫婦　山蛭橋殘獸
第五十一條　濃筵粉餅配　陰悪倒應報
第五十二條　後花十回窠　涙種一節籮
第五十三條　家廟投入花　弟迎常葉枝
第五十四條　濱角觝禄物　小壺海巨鰌
第五十五條　由井濱奇貨　執權邸交易
第五十六條　浮雲禳猛齊　團坐席夢話
第五十七條　節義守戸浦　損益頭髻塚
第五十八條　天妙女柱乞　勇悍人貨獵

本編五巻總目録終右第四十九第五十、兩條雖既出前輯總目録中而釐為本編第一巻因重出以充巻數

北條時政之

後妻牧之方

長舌危國
平勃未誅
良人非噲
汝似呂須

小阪太郎

兄弟角力不柔
不剛勇名雖惜
恥似閼墻

和田新左衛門尉
常盛

芋田乃
陀忠

北條相摸太義時

你是陪臣謨執國命若微泰時九世何盛

内寵勿憑命有薄厚王石猶焚氷山豈久

比企弥四郎能久

前報未盡
餘殃相同
祖孫終處
在浴室中

源二位頼家卿

二世暗弱
君臣亂離
秦有
閻樂
景盛
似之

安達左衛門景盛

その書ハ毎編五巻なるを是義ふ第五編と綴り一日書肆が時ハ後ることを鏤果ざ
り一巻遺しく鷲尾四巻を毀敗さり。かれが今この編ハその送れるを剽入れて必ハ巻の
ちぐりーとを肩又書肆の好ハ任しくちぐひも五巻鏤出さつ。五編ハ送せ一巻を
補ふ事のまに故ハ本編ハ楮數の例より倍を數ぎを一百四十餘頁ハあるのゆえこの五巻
ありとのふとも省官例の六巻ハ敵ん欲とその所為ありけり○右ハ見を出像のゆる牧子ハ初
編と五編ハ出さくこの編ハ出ざるをハこの簡端ハ画ゆをハ是義編出像の拾遺〈且安達
景盛〈比企弥四郎能久ハ第七編ハ出るをれを并ハ頼家の修善寺浴室中〉圖の
如ハも皆後編の趣向るを今この外ハ見をハ省官るのくこの画ハより〈第七編ハ出ゆく
とをあらめと想像せられて一端ハとそあるをこの室咲の桃桜を冬ハ梅萬ぐ類ありし。

姓氏追加　小阪太郎　富部五郎　和田三郎義氏　四郎義道　五郎義重　六郎義信
七郎秀盛　八郎義國　右兵衛尉朝盛義氏孫　安達景盛第七編　比企能久上二同じ
草賊鼠乃木衷平　芋田陀忠三　通計一十三名　崖略仰姓氏目終

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之一

東都　曲亭主人編輯

後輯第四十九

諏訪嶺の犲狼
照射山の狒々

案了前鞠再説朝夷三郎義秀ハ去る四月の中浣平泉の柵ゆ〈猛ふ光仲
義邦ふ辞〈別れ〈只ひとり越路を投ゆく程ハ追苗らくとをとそ徑岐道
足ふ信しつその順逆ふも拘らぬ又遠近をも擇ばいくぞくの日を経うけん陸奥
ある寶川より越後の八田ゆぞうゆ入りるこれ〈福取焼山綱木天満津川の驛ふ
四里ありし山路を来つ角嶋とう唱へる編村を過る程ハ前面ハ一座の大山あり。
名ふ越の諏訪嶺ありし時〈も四月の下浣山ハ半面雪を流〈て樹木の若葉ハ
萠畫さび軽寒軽暖他州の二月ハ似れども日ハを長ぢ獨行ハ言葉歇

あるゝ〜ときれば飽と兒は睡眠を催し餓れば疲労て歩果敢なし。この日も下晡
あゝ〜頻よ物の欲しゝ〜ふなりしふ颯と吹下る山風の魁はせんとくもて来つる酒の
香芬と鼻よ入りて。いと珍らしも好まし。忽地目覚る心地しく但見れば
ての村盡処よ只獨屋の酒店ありて朽傾ける茅の檐ふ高く一叢の杉の葉を
掛るハ彼味酒の三輪ありとも帝の謎あるべし門邊よ猛犬ハをゝ猛ど酒ハよ
活ぜとおほく一両脚の凡掛床几ハ寂寥としく憩ゆのあく突立ゝる土窓を
薪竭て灰冷ゝく鍋の中よりゝる湯氣絶ゝる義秀ハ性としく酒肉を貪る
ものゝ孩ども長途の疲労を息へん為且十分の酒氣を帯ばハ彼大山を
踰ゝるかゝんと思ひ立れば突立ゝる鐵棒を酒店の門の片隅よ倚うけて
菅笠の紐解もあへず。誰ぞ在らばやと呼ばゝる床几よ尻をうち掛れば家
あゝ〜ふん奥のゝまり一個の老人遽しく出迎へく客人酒を用ゆゝ欲五夕ゝり

篩ゆ〜ん欲有ハ豆腐の石焼と山獨活の酢味噌茹のゝりのづれをうめきそ
と問れく義秀うも微笑有ハ両種共よもそ弟よ。これハ十分醉んと欲を五夕
ゝるれ酒何よせん多少を問ゝ疾徐ゝとゝ〜ばゝるべハ斑多ゝ歯を顯しく
うち笑ひ客人ハ他郷の身なれ五夕ゝりとゝ〜ゝへどこれ商せ當州ゝくこの片口
ゝる滋器ゝとゝを〜ゝく五夕と唱ゝ〜ゝかれば是他州の酒五合ハこの地方の五夕ゝ旦
ゝる家の酒ハ茶薬漉あれども中汲ゝるべ酒気烈しく味ひ醇厚しく
人を醉をれば。その醒ると究めく遅ゝり。この故よよふ名ゝ所上戸ありとも獨酌よ
ゝ五夕の酒の上を過ぎゝと稀ゝ。これば〜ゝ國風の曲子ゝも醉ゝ〜ゝ五
夕の酒小一合過ぎば〜ゝ醉んと歌へゝ〜ゝと誇色よ答ゝる間よ恵よ
柴折焼く豆腐を煮ゝ〜酒を盪め彼酢味噌茹ゝ共よ冗くいと垢染ゝる
塗折敷よ安排てゝ来く義秀ゝとく笑坪よ入りて四表

八表を語らせて件の五夕を傾盡して再び五夕の酒を篩せあれども喫せねど
せしが見せしもせで盡しさりとてくる程に蝟餌求食る雛の檐下にかへり来に
るまじバ義秀これにおそろつぎて外面を瞻仰るに日ハ山の挾に没んとはおりしまめ
時を移しおうりとむとりごちて遽しく腰に著る貫緡をひろおのに解出しわに
酒の價を取らせ脚絆の紐を締更く左手に菅笠引提く嶺を望て登んとなせバ
あるじハ急に簸留め客人暮るるに程もなし今よりして數里の嶺をいでらハ越ゑん
いまぐ儲もせでゆくぞ近曽彼諏訪の嶺やそ夥の狼群がりて人を害ることも限なし。
昼といへども獨行ハ恙なきの稀なれバ五七人の同伴と侯ひて嶺を越るかし。加搆
おうじ比より近き山里なる女子どものめくらるるハあれしに失るをありけりもその程を密
と夫に誘られ出されしかりんとて彼此隈なく索ねしかどもその跡もなくその女子を扼之
邁ぬと思ふ男子もあらバ寔に怪しきすなりけりと人も皆我も皆誰ハ知せしかわねども。

ありし比より彼山に怪獸二頭栖みて必牝と牡となりて好みて人畜の血を吸ふに
女子ハ穴にさらひゆきて血のみを多からぬなれバ這奴男子をハ目をかけず女子のみを捉ると
ぞ。さらば女子に限るにもあらず男子とて油斷せバ可惜命を失ふべし。これらの風聞
がありしから客人今より夜を犯して彼大山を越なんハ幸なくて狼の牙を脱ることあらじ。
又彼獸の腹せのまんなりより山のおくふかきに行地の里まで八人煙もなし枉て今宵ハここに
宿りて暁にならんと正首に諫るを門の片隅なる彼鐵棒をもちて只凡庸ならぬ旅客なりんと察
するに精しき義秀ゑみくらも笑ひ山おには豺狼なれぞおそれん山魅木精もおそれんや皇天
皇土に生れたるよく天意に随ふものハ欲寡くしてせざることなく心丹田の下に治りぬべく
要時も内に動かせバ物亦外より害ふことなし人ハ獸を怕ることもあれ何ともおもはぬなりし。
さる怪談をおこらせて旅客を權して留めんと欲するも世渡るための方便なれど路を
貪りて旅ゆくものにあらねども憩ひて酒を喫ふるに軟く嶺を越ん爲ならねども件の

怪談に驚されぬくまで歌らバこの快酔をのぐハせんようもなく雑談せばもあれといはるて
あすハ頼あくまでも腹立く眼を睜りまれハ好意をもて云云といひすさを腹立くも
ものとりて世をうりし方便あんと朽ちてを朽をくれ今をを口ハ猛くも利け嶺まぐも
登著うぐ阿容々々として立返り宿賃せとてか勧解ぬひとと吠くを耳やもかけぬ義秀ハ
袖を拂ひく衝と出るを鐵棒をかひとり突立く遣といはぐいぐ出忽地に日ハ暮
々り山腹ハ他所よりも入相のいと早かるに比四月廿日あまり三四日とのふ鳥夜あれバ豫て准備の
續松ふ火を鑽移し道を燭して鐵棒右るまく諏訪嶺に攀登るふ昼ども人跡
絶る深山の夜ハいとく寂寞ふ山氣肌膚を犯しく夜風面を撲に光く巌石路
横りく樹根に足を取らるふ悩めり目よるるのハ星の光耳に聞めハ谷河の碎けそ
落ふいと凄じ義秀匹夫の勇者ねバ武藝に誇り膂力を頼て漫にその身の
危ぬと忘れるふわ〳〵ねども既に十分の酒気を帯てハ進て退くとの願く年少

れバ血気強くてかる夜行とまるのく〳〵ろ程に義秀ハ羊腸る山又山を或ハ
登り或ハ降り往来て今ハ嶺に近つぬぬんとのふ二十四日の月ハ出り傳ふ
子の半ばく〳〵この比の夜の短くとも嶺あぬも登著うぐ既に夜半を過せハ不知
崇内の故ものとのふのつく空よく晴く隈なく月に送られバ是より〳〵又
蕉火を續更ぬるの頻りに焦燥ふ又一段を登果く樹拉深る処に至れバ
忽然とく狼のく声高く出るり義秀これを物ともせぬを向て吼く猛
左右の山卯木のさやくと戦くるとを〳〵大犯る狼のその数九六七頭前後左右に
顕れ出くるを真圓にとり圍とり義秀ハ出り猛く些も驚ぬ前面に立つのる狼を
跳越て遁んとふ後方にるる一隻の狼ハ熊の如く走蒐りく義秀が腓腸を噬
例ぬんとく近つく程に義秀これを尻目にんく足を飛しく蹴と蹴る蹴られて些〳〵
怯む処を風標の如く身を振〳〵く鐵棒推取延て眉間を丁と撃〳〵バ一声

苦と叫びもあへず平張伏く死でゝうその際は前なる狼又後より走蒐るを義秀を
身を反して閃くと鐵棒は打れてこれも亦筋骨砕けく仆まとう残る五頭の狼はこの
為体は活路を求難つく彼此へ逡巡をする程は義秀透さじと叫びて四角八方ゑ雄
立れば狼ハいのく避易して逃とも脱さじとゐひん忽地人のごとくゑ立くものく腋の間より
明晃々なる氷刃を抜出さく撃んとせば義秀これを佶とゐんく原来癖者ごさゝれ遍
しせーと棒とり直しく大喝一声嘯く蒐れば毀ひ千鈞の石をもく難卵を推はな
異なれば狼ハみな瞬間は骨も續くなり殺されく繞は一頭送りしをそれそこ見を
うも落されく戦慄れく腰も抜しを抗声をふるハく克しめと叫ぶゑん義秀
呵々とうも笑く鐵棒右もふつ紀立汝ホこの假狼愚民を惑し旅人を殺しく
その罪を造りくる憶めゑ是汝ホハ山賊のいと拙紀ものこの餘の同類なゆゑん。
頭領立くる奴ハゐ紀欠詳は首伏せよいどゆいわと責問バ山豪ハ平伏くる頭を

擡くさゝひゆも及ばせゆひん某ホハ平泉なる經任ゲ大將は四天王と呼れる鐵眉矢藤五
重連ゲ隊兵でゆひ經任滅びゝうーと紀矢藤五は後へく奥を逐電をうーあり又
矢藤五はまく捨られく今ハ頭領もゆいぞ又この外は同類ゆーあるゑゑ矢藤五ハ曩に
經任を見絶く厨川の柵は赴紀彼柵の大將くうー象子彈平太負持を詐計て
軍要金三千両を掠奪り某ホを初く越前なる三國湊は赴紀て遊女们を毀
聚合て酒宴遊與夜を日は継くる樂ゆまゞ央なる毀の金を沙のごく用散を
ゆく疑れ忽地人は密訴せられく遂は守護は指向られる捕るの兵は不意を
撃まく且く防戦めのくゝ克くもあくれば壁を毀屏を乗く衆散をあり
しまり矢藤五ゲ往方をゆ某ホハ下隊七人當國は逃れ来くあの山林を所住と
せーふ近曽この山ゆを怪物夜めく出くく人を取啖ゆこの風説ありあくく猛は思起
しく七人齊く狼の皮を被紀く夜行を遮り里人旅客を追刼して露命を紫紀

ゆゑなくして謀計ハ有とかそも獣ハ姿を変ずべし山豪ありと八人みな走りて追捕の沙汰を脱るべく跡を隠もゑ便りとも相譚ひふまりくしあり所ハ大人ハ一人當千鬼神を欺く本吏あるを夢にも知らずして獨彷徨と侮るべく忽地命を隕しる六人の名ハ云云あり某ハ前乃木の哀平と名ゑるものなれば神威を犯しるその罪萬死ハ當れども頭ハ慈眼佛意をもて免しゑと勸解ハ義秀笑ひ冷笑ひ原来汝ホハ彼鐵眉矢藤五ハ隊下の小賊なりし狡れハ賊将經任もまた肩ともまたとあり紀然ハ況矢藤五をハ彼奴ハもまく柵を走りく且くも天誅ハ漏せしを遺恨なれ縱汝ホ数を盡しく幾百人聚合せもまれハこのゑホ唾しく蚤を取るまりと易なり勸解られとて汝一箇を免ゑ紀よりねども窮獣既ハ尾を垂く媚て命をもふと紀ハ猶夫もこれを殺さんかれハ今實ハ汝ガ首を且く軀ハ預ゑ殺せん迚も誅せしもまゑ天意ハ任もべしそくと

いひけく近邊の藤蔓引断く犇々と縛ゑ猩兒のごく牽あく光る松ハ繋ぐおろく陰霾る雲月を隠しく朦朧とある隨ハ夏ゑ寒紀山風のゑ腥く肌膚を徹しく毛骨栗立つ程ともあれを怪しげる二頭の獣突然と走来く六箇の賊の痍口より流れる血を吸ゑく共ハ餘念ハ紀ガ如し義秀こもを透しく酒屋のあるじ云云と不問語とをうる怪獣ハ見ゑれ先ハ奇と鐵捧をゑもく取揚く寇近つ紀邪と声々けく先ハ進ミ一獣を微塵ハ碎れと宵下せバ獣も亦眼ゑもくく一丈許退紀ハ三頭等しく疾視る晴の光ハ四下を射て長庚よりも輝く義秀ハ一の棒を翳損しく遺恨ハ堪ゑ再び間近くよせんとゑれバ両獣も油断せず迚ハ透を窺ひく義秀焦燥く打棒ハ来らんと進むを反落く頭短ハ颯と引く程もわく一獣忽然と後方ハ立く攘臂く倒ゑ義秀ゑもくくくくして鐵捧霎時も止ゑ輪々々と風車の遶る似くハ振

廻りて前後より些もよせ著けざ進退不測の修煉の効奥精神ますます加はる
鬼を拉く槍法より怪し兇両獣ハ敵しかたの隅数矢と打折けバ一声叫ぶ声と倶に形ハ
過さず追携さく些し後れし一獣の減さあらるも義秀ハその一頭ども始ず苗ざりるとを打そしく多人ども雲
かゝれせし月さへ出ぬ不知案内の山中を追ふともいでゝ及ぶ所をあひ〻しく
徐々と奮の処より退ぬ松の株より尻も掛く且く汗を納れてゆるその樹の蔭ハ
繋れる荒乃木の表平ハ怪獣の光景と義秀ゲ疾働ぶ我を忘れて醉ふ
如く呆惑ゆくつのゆるう浩処より峯上を隔く咄と揚る鬨声の始より応て響く
その男九百人許あるべく照らす焦火のあるかぎれつ隠ことを衝さよこやさ近つを
義秀遥より佶とんく噫あるも始めのそ者つをこの山賊の支黨狡さう
ぞハ狐狸の所為狡をもあれかもあれ這奴何ぞりのるゆハるるひのまよ

うよりて鑿ゆくらめんぜと獣ゆくうゆ領ぶく働と身を起しそ件の棒ぞ小敗より
挾を立ぶうる且して彼衆人ハ間近くある隨より真先より進ぶしハ見ゆ一個の武士
あるるを年齢ハ五十のくらと三四ゆ有ゆのぞうん初勝より野装束しを腰ゆ
朱鞘の両刀をゆゆ〻げゆ跨ぶく左ゆ重藤の弓を握ゆるを携ぶる背より箙
箭の箙を負ゆぶう相後ゆ者共ゆ或ハ弓箭或ハ竹戟及列卒縄を要ゆして
みな後れじと進ぶう當下武士ハ義秀をとゆゆかぶうゆんゆうして其処ゆる
什麼何人ぞゆと問へバ義秀声高ゆふゆれハこの山を過ぎ旅人ゆり和殿ハ亦何
人ぞゆと問ゆへられく些も擬議せずゆれハ津川の荘官ゆく皿山盆九郎高盛と
呼ぶゆゆ近曽この山より夥の狼群ゆく人を害ゆと多ゆう又怪獣ゆりて女子ゆを
捉るとゆえーゆ此彼とゆふ獵弾さんとて里人獵夫夥ゆく今朝ゆり深くゆけ
入りゆ獵ぶくゆハ照射山獲物ゆれバ二鞘の家路をさして還ゆるゆ図らぶ

諏訪嶺より
義秀七賊二
獣を退治す

物を獲ることなれども和主ハ何ホの故ゝ夜をこめて山を越さるべしと再問へバ義秀答て
曰ハ陸奥より越後を過りて越中へ赴くべき角嶋ゝ宿とるべきを数ゝ道を食
まくこの山路ゝ日を暮して今あり些し先の時ゝ山もこの処ゝ狼ゝ打扮して
山賊六人を打殺してその一賊を縛置りそのゝ怪獣あり二頭忽然と走来て死骸の
鮮血を吸ひ尽バ又これをも殺んとせしゝその疾飛鳥のごとく猛犬と見狼ゝ勝
れとも敵ゝ難くしてその一頭の肩尖を打ゝ倒れぜしゝ逃去る
路間ゝれバ追ひも索ゝ後ぞかくてこの草賊の来歴を責問しゝ箇様々々の奴原
ありしを送りもなく告るゆゑ盆九郎ハ聞も果さしゝ驚ゝ且歓びて従者ゝ
焦火を抗きしゝそゞ俱実撿しゝそゞ果してゝ大なる狼の皮を被ゝ暴男
共を食べく六人肉破と骨砕けしゝ死骸ハ算を紊せしゝ又一人ハ藤蔓をもて松の
幹ゝ繋れしゝ尽れしゝ大約その遑ゝ今まで来る峯上ゝ人生血を引

なるを殺しゝ盆九郎ハこの光景ゝ驚嘆しゝ恭しく左右のゝを勝ゝ措つ
義秀ゝ対ひ凡眼明ゝ世の豪傑を認られしゝ殆礼を失へり願ハ海容
あらんそゝ和殿ゝ一臂の助にてこの山賊を悉誅伐せしゝ一隻の怪
獣を獲ん事既ゝ如く某今朝ゝ猟暮しゝ真夜中ゝ及ぶまで眼ゝ
遮るものゝ空しゝ還らんとせしゝ今峯上ゝ怪獣走来つ彼射留ん
いふ程ゝ忽地ゝ仆まん炬光ゝ就しゝ熟視れバ奇怪の形状ゝ
腋下まで打破られしゝ骨砕け血の流るゝ殺しゝ原来この痍ゝ斃れしゝ什麼
殺ん人を捉るゝ怪物ゝ倘甦生せるゝ
敵しゝ短刀ゝ吼を深しゝ刺んとせしゝ皮肉堅しゝ刃を受ゝ辛しゝ
刺串ゝ足を縛め杣ゝ掛しゝ六箇の里人ゝ早しゝ
彼猛獣ゝ疑ひしゝ

下知されバ里人ホハ件の獣を焼うて近く昇まるホ又一両く蕉火を振照しく左右ホ立り當下義秀ハ徐ヨ進ミてこれを見るホ獣の揔身四尺ばかりく面を画る夜叉のごく眼圓ヨ唇厚く牙尖しくその口の大なること頤ヨ連りく耳の下に及べり況又長爪ハ劒のごく赤黒紀毛ハ赤熊ヨ似く頭毛いと長く蓬を乱て尻尾垂ろ死しく眼を閉ぢ恚を送も悪相ハ怪しくとも疎し義秀ハとさ為かくさの猶つくづくとうる程ヨ盆九郎も又進ミよりく某壮ありしと見て獵を好て山又山かるけ人ヨと屢ありしホ獣とうんぬこと何とのの弟やんと問バ義秀沈吟じくこれハ狒々の種類なるべし嘗聞唐山劉宋の建武年中のひ鶴々の雌雄二頭を進らせしをあり多鶴々又これを狒々とのの國俗の山深と呼做せるを狒々と異あり時ヨ宋の明帝その王人丁蜜ホ問ひく鶴々を形いろあるものぞ答て言さくその面粗人ヨ似く紅赤色あり毛ハ猴ヨ似く尾あり。

よく人のごくそのいふ鳥の声の如しよく生死のヨを知て力千鈞を負ホ足れり反踵ホく膝ホ入れバ則物ホ倚る人を獲れバ則先笑しく後ホこれを食へり。獵人因く竹筒を臂ヨ貫けく誘ひ来ればその笑ハ時を俟く速ホ筒を抽て錐ホてその唇を釘ホく額ヨ著れバ猛とくも必死せるを候て裂て血を取るものあり。その髪ハ甚長りく頭髪とあるホ佳血ハ韡及緋を染ホ堪ろうこれを飲バ人ホ鬼を見ることを有とり明帝ゆかく画工ヨ命てその形を圖せしめ本草集解ホ所見あり今これを彼をあり人ハ狒々といふとも遠くてさびれ人を咬て死その唇を反して笑ふ甚正しくこれを好く人畜の血を吸ふホハ素よりその身ホ血あり類を感しく嗜ホんと言精細ヨ解諭せバ盆九郎ハ歎服のあまを額ヨ推當く感ることを半晌ばかり。和殿ハ實ヨその武藝の抜羣なるのみならず文学ホも亦蘭ヨ貴名を

とをねがひ願ふ名告をもゝ宿所へ倶して歓びの盃を勧めそんあれ愛さの
俊又やと只管誉て已ざりける。かれども義秀ハ聊ゝ有れバ終ゝその實を
告ずこゝ為ひけもの賞美ハいく分ハ過ぎう某元来安房の浪人浅江小豊六と
いひのゝ親族ゝ妻子もあれバ武者修行をせばやとく旅より行ゝ月日を弥
ゝ此度ハ越の中國ゝ志せりあれバ縁竭ゝハ再会ゝ繁留る衷平ハ
置土産ゝ進らゝ免さんとも誅せんとも国法のまゝ計ひ免ゝ退らんとひけて
立別れんとしゝ盆九郎ハ祝ゝ携て遠ゝく引留めゝ酷情ゝ某ハ潰り
この荘官る甲斐もゝく民の害を除れて土地ゝ功ある旅人を一宵も留ぬ
これを労ゝとゝハ後日ゝ守護ゝ有ん咎を蒙らんと疑ひ一柱く且く立ゝ
とゝ引ゝく放さゝハ義秀ハ已ゝを恨ゝ僮ゝその意ゝ任ゝ却説盆九郎ハ
若黨軒松妻二郎ゝ両三人ゝ分付く六箇の賊の首を刎さゝ被ぎる狼の

皮ゝ暴しゝ是ゝハ列卒ゝ舁ゝ又衷平ゝ牽立さゝく義秀と共ゝ麓ゝ下りく
角嶋村ゝ過ゝ天ハほのゝと明ゝ。
この時既ゝ起ゝく門の戸ゝ推開ゝ津川の荘官がきのふゝ家ゝ遣ゝる
旅人と列拉く駅の役者ゝ罪人ゝ牽ゝ
舁ゝ意氣揚々ゝ還ゝ訪ゝ限りもゝ後れる従僕の伜ゝ近く
立向ひく縁由ゝ洛れハ従僕ハ誇良ゝ義秀が衆賊ゝ殺ゝ獅々ゝ殪せ為体ゝ
言葉ゝ詳ゝく告ゝハ呆れて吉ゝ吐ゝ人ハ見彼ゝ
ども彼旅人の柔和ゝ某ゝハ一切ゝ
いひゝ
程ゝ義秀ハ荘官盆九郎ゝ誘ゝ舊来ゝ道ゝ立ゝ宅所ハ津川の
駅ゝ東へ入ゝ二町ゝ構の衡門ゝ老る松柏多ゝ里人ゝ字ゝ

荘官林と呼做たりし盆九郎ハ、かゞ宿に還ると忽ち義秀を客房に請坐へつ。あつく早飯を羞め浴室に入れなどしつ、その管待等閑ならねば、かくて又盆九郎ハ諏訪領なる山賊と狒々を退治せし為体を一通り書写して、飛脚に齎して國府へ遣しつ。又表平を鞫問するに、鐵盾矢藤五が残賊なれども外に同類あることなし。よりて表平が首を刎て、彼六級の首と共にこれを津川の市に梟て、狒々の頸も鐵竿に貫き添てその獰暴を牌に識しつ、示せるに傳聞の陸続と東西より南北より走聚りて両三日観者恰も堵の如し。これにより義秀が浅江小豊六と名告る假名も亦高くなりて、只管にその武勇を稱賛せぬものなかりけり。又彼狒々の聲漏されし一頭ハ遂に深山へ逃去りて、爾後ハ竜村なる女子の失る事もなく、賊の患ひも絶たりければ、人みな安堵の思ひをしつ、かの恩を喜ぶのあまり義秀が生祠を祭るものさへありしとぞ。

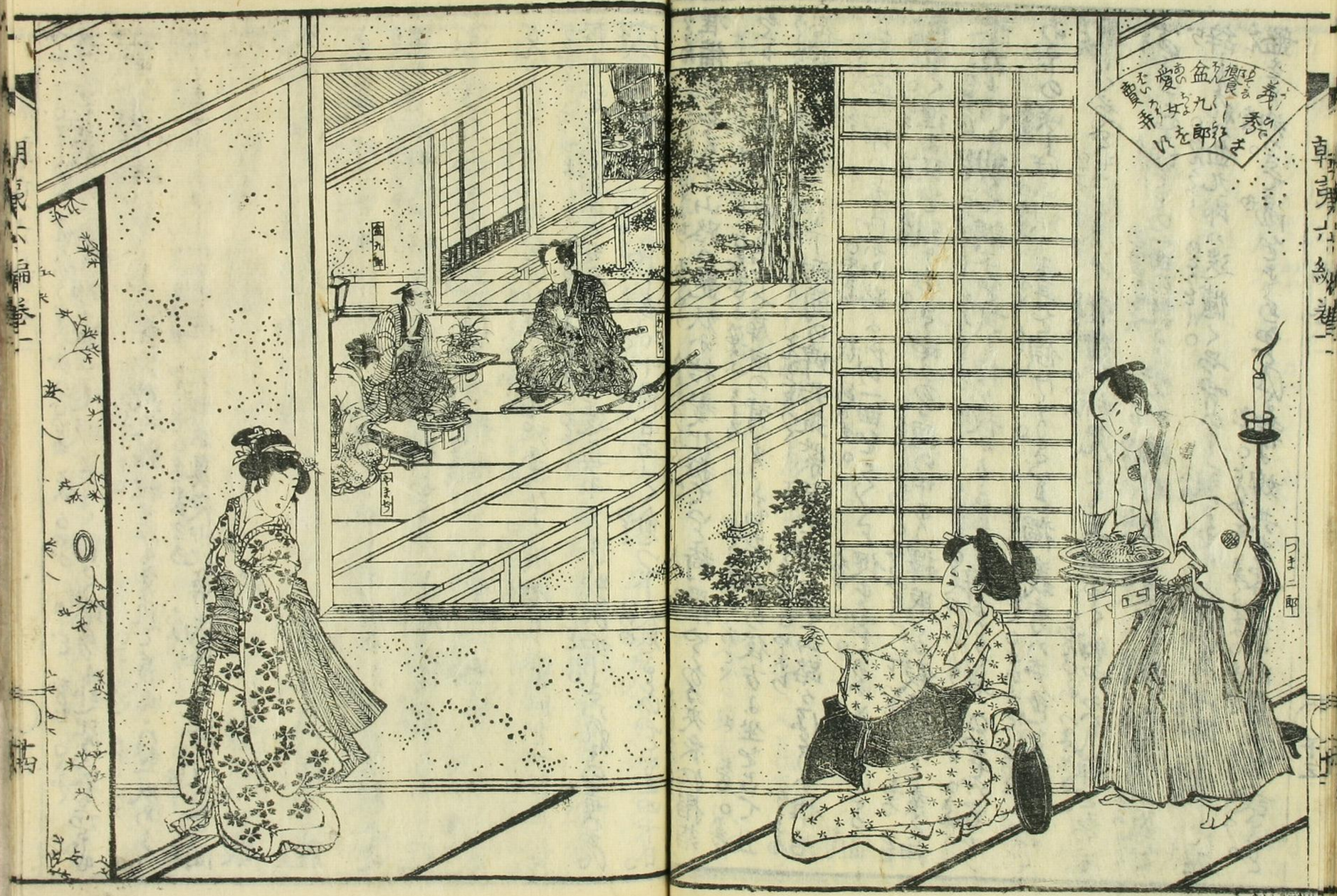
後輯第五十

荘官林の淫女　山蛭蟜の残獣

再説荘官皿山盆九郎ハ妻をはやく喪ひて、只ひとりの女児ありその名を山路と呼做せる年八十七八なるが、かゝる佇山里に生育ども、その才貌艶ならず、母ハ國府のものなりければ幼稚より筑紫琴を幾組か習ひけん、土地に罕なる風流女なり。母なくなりて後ハ盆九郎、父の寵愛弥ましてく佳婿をかなとて擇むに田舎ハ人物質朴なるを山路が意に稱はざるなれバ、縁談今に整はず。これが為に思ひを運らし情をよせるものもあるべし。親盆九郎ハ女児の為に奸を防ぐを倫児を禦ぐが如く深窓に養立て、傻蔵が女児かもや八坊らにと思ひより他話休題盆九郎ハ義秀を饗応せんとその宵酒宴の席を開くに海味に疎き山里なれバさせる庖丁ハなけれども、抑葉の年魚の素焼藻伏束鮒の骨膾など種々酒食の

准備せ東道態大々しく書院に燭臺を措並べて義秀を待ち侍
奴婢ハ銚子を執るもあり配膳に侍るもあり賓客とぞ稱する當下
益九郎ハ茶しく盃を抗つて義秀に勸めく浅江なり恥らくハ滋味珍
饌よむ〜ねど願ハ一度過ぎ某何ぞの福ありて欲ちろ世の豪傑
値偶の歡びなる討とく紀山戯異獣の一時に滅亡せしの頗附驥の
面をおこせり迎上ハ忠節ハ[illegible]記録に載せ子孫に
伝へく話柄とぞ紀のを皆是和殿の賜なればなす志を表ハか村
酒とく嫌ぜハ本望をとぞ義秀も亦饗膳の謝を述礼を盡して或ハ
受或ハ授迄に浮つ浮られて初献やく多く果しと紀益九郎ハ又義秀にちち
對ひく某一個の女兒あり山路とぞ名つけるを拙くハゆへども筑紫琴弦を
ときゝ者り彼と有に今一度過ぎと勸めて山路〻〻と呼び[illegible]

准備をちろん山路ハ艶妖め結髪化粧てと綺羅やある夾衣に摺箔
あるる帯やの字の似く結下て屏風の背よりもなる親の後方に坐を占て且
義秀を拜しけ當下両箇の婢共筑紫琴を擡来て山路ゑ推居
ハ益九郎ハ琴ゑ[illegible]ふ山路に例の一曲をとくと促せあぞよふ羞らひ面
色やく僅に琴を[illegible]ある匣の中より擇取る假爪をと素く細
やある指に絃を調子を試に梅ゑ枝ふ[illegible]鶯の囀るとく唄ひ出ぶ容
あるぞの咲ゑ顔に耳を傾けうさぶと獨義秀ハ声色を好ぶべいと
厭しくもとどもさぶ[illegible]脳中ハ爪彈を[illegible]
ぶるとそのの一曲の訖とやぞて酷酊席に堪ぎと称しとぶく盃を
辞しんれバ益九郎ハ送憾くもめつ強まるとく山路を退して盃
盤をとり納やさて湯をとめぞ程に婢共を客房に臥蓐を布設とと


月夜八編巻一
つき二郎

告るあど義秀ハ盆九郎ヨ謝を述眼を乞く躯房ヨ赴起居容ハ
昨夜通宵睡らざりしうへ疲れ衆人熟睡せるも疲れど義秀ハ翌朝ハ
辞し去らんとあひしかどその暁ヨ起出ル真夜中比より雨降そゝぎ且くも間
断なく今朝ハ風さへ吹暴うこれより盆九郎ハ頭りヲ苦めて已ざれば義秀ハ
風雨の為ヲ又一日を過せ程ヨ忽地足ヨ疼痛を覚て左の向脛高く腫
うこと一昨の宵諏訪嶺わく彼彿々二頭を前後わ引著撃倒さんと
進ミ来れ聊ハ被られしと雖ども怪ハ患ハ氏痍とハ
そゞ俄懸念せざりしかこれより苦痛酷しく心ざりハ早れ歩不便ヲ
せんもぞ盆九郎ハこの形勢ヨ驚き憂ひく彼此より醫師を招て病症の
軽重を訊問ヲこれ全く悪獣の送毒ヲ受しもの如しさばれその毒ハ
浅ろり氣長く保養しあらば十餘日わく愈つべし愈るとも三四十日

慎ミて禁足せざれハ筋縮り骨冷く廃人となるんと五人わく四人ハ
これ盆九郎ハ為ヲその醫師を擇ぶ湯剤膏薬授るあわく日毎に
義秀ヨ勧められハ五日わく膿血潰え七日わく瘡痂を生し十三日に
全く癒ぬ義秀ハ総角より一日も病るとのあれハ心頻ヨ焦燥くも辞し去
らんとあれども醫師ハ盆九郎も今ハ再発せばハ
且くと禁める浅ろぬ人の誼意を破らんとあきらめ一日ごと明し暮し又
十餘日を経よれハ皐月雨も稍霽て夏も半ハ過ぬ。これより先ヲ
盆九郎ハ義秀ヨ退屈させじとて務の暇ある毎ヨ問慰めたりとあく或ハ文
武を討論しその日を消せともあり或ハ江湖の雑談して燭を秉る宵も
あるも義秀ハ性とて生平ヨ言葉寡くれども議論ハ敢て讓らずあく宏博
妙論意外ヨ出く新奇ヨ及ぶれハ盆九郎ハ感服して拾ふくやの

あまり有一日具に告ていはく言究やく卒命をいと無礼ことおろかれん欲其
今一條の商量あり寔ふ奇し紀縁しそかく裏ふ交まあへば且試ようのぞん
曩日見参ふ入うし女児山路ハ年もまを十八よなりまう壻とうんぬ用意
その人をゆるれば今ハ至れま某ハこのそう十餘村の長ふ莊園も如此々
ゆそう鄙語ふいふ鳥あ紀里の蝙蝠ハ似れども里人ハ尊敬せられて来馬
あり畊牛あり奴婢十餘名を役使へば衣食ハ乏しきもわしを邂鄙の卑
職を嫌れをハ山路を和殿ハ妻しく職役所領を讓らんとおのこ光陰の
過易紀を白駒の隙ハ喻うふ血氣ハ任して旅あり行ハ武者修行あるを
今泰平ハ世あれをを武を用る時あるを願ふハ留りく生涯
無為を樂をへうう宿望ハこのようのこ和殿のあうつゆをやといと正首ハ相譚
へば義秀ハく眉うの顰め一所不住の某をうこと篤しうそう許ふ及ん

と欲ぬ紀ものあれども某性僻不覊ふく人の壻とあり果へ紀人貫ふ
あるし且をくより思起して武事修行のあ國郡を遊歴せんと欲ぬ北國
をうをを極めを況京より西のく四國九州ハまをくを寔ハ光陰ハ白駒の隙を
過るう如し倘中途ふく抑留せられば生涯悔るとも及ひをんをく故遣られんを
遥ふまして也と推辞を聽うを推ふして和殿の武藝ハ既ふを諏訪嶺ハ見聞
うをの勇力ハ携ゆひ鐵杖ゆく推量りつ廻国修行せをとをも誰うをの
右ハ紀相応しかぬ婚縁を強く勸るハ嗚呼かくれと某も両刀を身ふ帶ふ
あふ言ひびをまりををハ駟も及ひをし嫌れうとを意を盡を言を盡を
この侭已まがれの日あり遺恨を解んをく深念をあをとをひつをの言
果紀ハ義秀因しとをを又紀人の厚意ハ悖をうハふ薄情ハ似れども匹夫も
その志を奪ををうを況大丈夫うのをを宰我子貢を媒妁ふくをうて説を

ともに別を吝んうもなしかくても聽まじへ病瘡全く愈ともあれ袖を拂ひ去らんのみこの餘の尋思いかぞとは声高くあまねく隨ひ氣色なうそしらべ盆九郎は愁ひ不覚のうちひろけく悔しかるよ腹はいそどもさうとそ色も顯はれ肚裏よりあうこの人實はうら女見を嫌ひあれて且く底意を探らんと推辭あるあらんぞらんあらべ一朝一言ふ綜整ひ深あるせんとあひ久あく。さて雜談は紛らつ遂ふ強ぎうり卻説皿山盆九郎はあひ起せ婚緣を推辭まてあるいまさくとうあかうまあり彼人武邊と旨とうく色情は疎くとも豈をあいあどくあらんやその身の浮浪を省みて久後遂ぐこと思へあらんうら家は祖父の世平家盛ありし時よりこの一郷を管りそいぬ元暦文治の年間より鎌倉殿の御家臣あれども村落國府へ遠ければ人は知らうも如何親しく鎌倉へあり勤ふは法ふもさらも彼人を女婿ふせばその武孰を文学まそれより家を興きとそれあるべうぞあふ軽諾へ信寡し彼人即座ふ兼しうしへその性浮薄はあらべ此は就て彼はつ行くも走らしかれば〻と思へ宵中のそぐへくその夜竊は山路はいあらべ親あらからの芝示はい要あるかきあれども彼浅江小豊六を壻はせやとはひつみづうら説勸はいかに武者修行の志願ありとそ彼人はうけしぞそはとあれかくもあれ小豊六はあうあり山賊異獣を退治しそ民の為ふ害を除きしうら宿の賓客へ郡の長の大うそ愈うとそあれども醫師の歩行を許さねば籠りそ使然のうべし。さあくとも降暮を五月の空は癖あれば軒の玉水音も絶せば夜は衣を襲ふ夏あれどそく冷あり山里は蚤も多く悩も苦はひど旅あれは寤寐不樂しく侘んぞうん今宵はうしそ宵〻毎ふ彼人の枕邊へ行ん日来嗜みの伊勢物語をうそ邊うく讀て慰めあるぞとはひ被てうも含咲は山路は顔の報むすぶふ羞

て心せぎうしるをあぐくいかまとく兼うかりかくて山路ハ初更の比より物の本を携つゝ客房へ赴くとて或ハ子二ツ或ハ丑三ツ深ねば退妃さくものが臥房ふ入ることなく妖婢ふハ情由さへよくあらく密々よ識まども盆九郎のゝ獨笑して綽こや成ぬこゝのゝ謀計ゝを淺をかれこれを仔細よ原れば山路ハ親ふ分付ゝをして雪々毎よ義をんゝ慰る狡と長へバ此あゝ渠ハ像てあり密夫あり盆九郎が備若黨よ軒松妻二郎とゝるゝハ陸奥の信夫元晴よ仕へるゝのゝ元晴ハ戦敗して賊の兵ふ圓山の館さへ灰燼とゝりし比妻二郎ハ辛して蟄を渡し圓を脱れて越後の津川ふ落留り由縁の家に寓居して一日々々と送る程ふ荘官屋敷ふたち入りく三四ケ月を経るを抑ゝの妻二郎ハ今茲二十五歳ゝ故主の戦殁を外ふんて逃竄れるゝのれば素よりその人とありを賞ぶ容貌美くそその進止賤しかゝ且算筆ハ人あるくふ優くゝよるゝのゝ。この時盆九郎が家の若黨且く身の暇をとゝ舊里へ退りしゝ盆九郎ハそゝ又立かへり来る日まゝとくゝの妻二郎をゝび取て月傭ませし日より心を用ひて勤れば盆九郎ハよ代の人をゝるゝと歎びく早晩宿所よ起臥させく不便のゝふゝ程ふ妻二郎ハ今且くの主ゝ盆九郎が意よ稱くく出頭をるのゝ。山路も竊ふ愛驩びく親をく抱ひゝ。抱くゝて罪ある玉とゝ統ふ外視の関を越ゝと幾遍こいかとおそれゝ盆九郎ハこれを知らゝ山路が月来塔をゝみてその婚縁の整ざりしハかゝる密夫あり故ゝとハ一点ゝりも曉らゝび今義秀を留んとくゝるゝ所ふを女児よ誨くゝとの遥奔を肥さゝるゝ。されゝをあゝとその霄ゝり山路ハ親の意を受く義秀が起臥をゝる客房へゝくゝゝふゝく彼ゝりゝへ寄も著ゝ次間ゝ編室ゝて妻二郎と密ゝふハ私語の粗漏をく義秀ふゝるゝふゝゝゝゝの隨よ溢ゝの雪とゝゝ

義秀ハあまた〻の光景にいまだ爪弾をせざるをふかく肚裏に評するやう。この主人金九郎ハ。邊鄙にハ稀なるべき武事も文字も些ハあれども取に足らざる小人なり。渠が客を愛するも文人を識るごとくにあらず。みな名聞のためにして實への利を揣るのミ。あまつさへ裏柔弱にして表剛く。陽ハ公にして陰ハ私多かりさるから土民を憐むごとくなれども公事に假託て誅求ること少からず。且施を好むに似たれどもその性究て鄙吝く。これを奪らんと欲すれバ先且くこれに與ふと老氏のいへるに似たるものなり。されバ頃日その挙動に意を附てこれを知れり。其賄賂を受訴訟て足ることを慾ざれバ賞罰共に正しからで。ともかく愛に溺る故に閨門の内おさまらざる規その女児の淫奔なる遠からずして殃危起らんさるをこれ今そうらくもこの処に抑留せられて婿縁さへおひいひ彼られんハいとも恥べきことなり。毒瘡既に愈ぬれバ日ならず発足すべけれとおもひ決めて只管にあるじに別を告んとて金九郎を尋るにきのふより公役にて在宿せずと答へしかバ辞せず去らんハさすがに心なきがたなれバ又あくる日二日と送る程に五月も下旬ハ絶になりて黴雨晴の天定ならず梢に朝蝉声々鳴て北国も稍暑に向ひかゝりし程に金九郎ハこの両三日公務ありて家に在ること稀なれども。かゝる謹みし婿縁の一議ハ霎時も忽にせず忘れず既にその日果しかバ今ハまた比なからんとてこの日宿所に還るとやがて女児山路に耳うちしてやう。おん身ハ月ごろ此彼と婿を擇みて決めかねしを浅江ハあやにく稱ひつらん。これもまたよるとし浪の頃をも越て空しく後をまつべく過たるべけれバより今宵小豊六と婚姻を執行ひせん。さあれども彼人ハ〻に偏屈なる壮佼なるからその身の浮浪を恥らへバなほ云云と推辞やせん。かゝれバ且告ずして今宵不意に盃をとり結せんとおもふ。おん身ハその准備して風爐にも浴るべし。化粧もすべし。日暮て物よく整ひなバ祝儀の衣に改めてひとり彼処へ赴べくいふものから慇懃なる

これハ時分を見計まく。あるべく箇様々々にいはん内祝言のすりかれバ嬉しかくも
。すしをも後日よ里人を擇まバいつもその人あらん今宵ハ黄道吉日なるに五月と
いふともはじまりハあれバあろうぬものと真ごゝろく竊よ謀合しけり山路ハこれを
呆れて暫時回答もなさバ忽地胸ハ塞りていとうれしくあれども今さら推辞
べくもあらねバ愁の眉を恥しげに面色に紛らせつ。ともかくいふまゝく領きしを知か光
悴子ぞとおもひとる親ごころをも無慚かれさる程よ盆九郎ハ今宵の酒食を塩梅
せんとて且くも庖厨を去らバ謹侍いる奴婢共が揃る擂盆ハ雨あらく神社
鳴る歟と疑れ敲く青菘ハ人の日ならで七種雑をに似うれぞその献立を候へバ。
塩竈混布に巻鯣これらハ座著の肴まく青鷺の吸物に片薯蕷のおしひたし。
火とり加減が肝要ぞとろバに世話を焼味噌ハ苦り切る蕗の葉の刻茄をまく
雑あとそ上を下へと返しなる絆の紛れに便をゆる山路ハ竊に妻二郎を物蔭に

招ぎよりて今宵のすゝを云云と告て頻よらも泣ぐる涙の隙よ又いふやう浅江と
やらんが止宿せしかどあハ座敷の塞がりてあり夜ハいとゞ稀なりしに家尊失人に
云云といはれしうへを知りしより絶ぬ夜毎の手枕も夢さへ覚て浅ましや終よ
脱れぬ今宵の婚姻飽まで親を欺きし不孝の罪を重ねても我身を棄つ。
捐られて他夫に添をんや契りし言に偽なくそともかくもしてあひねとのひつけて
又泣沈めバ妻二郎も歎息しつく。絆既にも急なれバ且くも猶豫なくらし今宵
あん身をぬく走らん追人萬りて脱れぐくハ共ハ倶よ死んのさうして往方ハ云云
あり出る暗号ハ箇様々々と耳示して隠れバ山路ハやう/\涙を歛てうくその
夜を契りて謀合して別れなりかくてく山路ハ外視を竊みて日来愛せるおび衣を
いくつか袱よ包みつて臂近なる沙金流銀十五六両私してそっく妻二郎に逓与せし
うべ妻二郎も亦竊々に起行の準備して日の没果るを待つ程にはや黄昏になりに

々り當下妻二郎ありしが故郷ハ親同胞もあく親交も或ハ討ル或ハ落ちう
くるゑ今更奥の高舘へ処るも又誰ぞ憑ん當國蒲原郡なる新潟ハ聊相
識る者あれば且く彼処へ落著て其処より京あれ鎌倉ハれ便宜を求ゆて又
さらに走らば後悔なるべしと思ひ決めく山路ハも豫て云云と裏なる路費を腰ゑ
袱包を引提て出んとしたるこそ見れば褊室の壁よ掛る一張の半弓あり
妻二郎又ぞ云ふ今新潟ハ赴んゑ両條の路あるゑ中ハ五泉街道ハ坦地れ
ども追人もあるを指も知べし諏訪嶺ハ難所なれども路程いと近り今ハしも彼
山ハ山賊の患もなく猛獣もなくぶと性けども女子を拐くもく深山戦ハ究竟
物ゆえ追人逼らば樹隠れて遠箭ふりけく射て落さん嗚呼あるべしと遠しく
件の弓をとりあつて蘭の備箭二條ばり抜出とり添くるもく小脇ゑ挾こ
外面ハ出く侯べ山路も暗踏を違ハぬ〜く庭門より潜出ると妻二郎ハ遠し

見く走りよりつくるを披扶けて西北をさして走りゆ有斯れども盆九郎ハ時
移るまでこれとちゝびその夜初更の比及ふ饗膳ゆ多く整ゆられも衣裳を
改んと納戸のくゑ赴くと客房をさし覗くゑ山路ハ彼客のほとゑ〜びて豫て
諭せしゆるゑ渠何処へ遁ぬるん是首欲彼首欲とぞゑふ家の内隈もく
厠の戸まで開つれども影も見ん〜ば跡もゆ〜あるゆと駭驚く猛ゑ奴婢を
集合ゑ山路を走〜ぶる扶妻二郎も何地ゆ行ん〜いと訝しゆ〜を倘その
情由をあるゆのゑ〜ハ憑ゞ告よつゆ〜ゆと舜せ〜しく咨ゑハ奴婢ゑハ目と目を
注して舜等しくゆひそゆ現さるゆ〜ゆん〜ゑハ昼より娘ゆゑ間ゑ〜ゑ透ゆて妻二郎と
密語くゑも泣ゆを罪とゑつけしとゆれども情由とてハあり〜ば〜ば加賀娘ゆゑ
胥々毎ゑ客房ゑる賓客を慰めゆと家尊の仰を受ゑると宣ひと伝ゆ〜ゑ
客房へハ出ゑ〜ゑその次ゑる褊室ゆく妻二郎と楽しゆ〜ゑ相譚ゆハ微音を沖ゆ〜

宵ハ見られぬそれ程情由ハ為ら[illegible]を盆九郎又果て原来山路ハ妻二郎奴ら
誘出さく走りしあん噫無慙や今ハ[illegible]衣桙の引ちくされハ失る物もさぞあらん
[illegible]汝ハ告ざり況それハ賓客浅江生を婿ぐ[illegible]の夙望あり彼人ハも尚報ねども
推て婚姻の用意はこの種々の献立ハまく今宵の儲ありしを今さら山路ら在ぜ
ありくを挿頭の花と風よ奪れ掌中なる珠を淵ハ沈やし心地をこれらの縁の
趣を浅江生よ失れあバそれ亦何を面目ありて[illegible]ハ解よ辭あらんや汝ハ豫てより
こうよりあり知りあらうそれは告ざりしを越度[illegible]なくハ彼妻二郎ら故郷を
陸奥の高館へ又當國の新潟ら由縁のあるとりとりの[illegible]投く往方ハ高館歟
新潟の外あべらず憧僕们ハ二隊ハ[illegible]て西と東へ追遣はれハ里人を駆催
しく諏訪領のことを追ひそん噫無慙やを敦園さく只管ハ[illegible]立れバ憧僕们ハ
ろ[illegible]果てあのく焊棒蕉火を引提く外面へ走去りしを程もあらそれ盆九郎へ

竹法螺取て吹鳴らせバ彼此なる里人ハこハ何ものぞと驚騒ぎて利鎌連枷を提
引提荘官林へ聚合あん盆九郎ハ綟の延云とも[illegible]ハ苗字ハ老僕と婢共よく
せあるとハ[illegible]も訖らバ刀を引提て遽しく[illegible]外面へ出れバ里人ハ蕉火を
照らして後ひろうされバ又義秀ハ毒瘡大くく愈しなる日より盆九郎ハ引
告んとあひしを宿所ハ在らバ[illegible]ハ昼ありあるれ声をれバ
今ハ発足せとく心ぢろハ早れども庖温のくハ人集まく薪水を暇なれバ
奴婢ぢらあらんあつらバ況主人ハ[illegible]その鎮ることあり程ハこの日も[illegible]く暮ハ
[illegible]初更の比及ハ家内猛ハ騒動しあるドが頻りに罵る声奴婢ハ問答れ
彼共ハ取ぐくまえしバと疎しく耳苦しきハ勃然とくあらあこれ
玄児山路とあんが妻二郎とろハ若堂と逐電せしを豫てよりさもあり[illegible]と
ちひしよそを驚くべ況ハ盆九郎ハと[illegible]を礼ある女児を餌食ハれを

釣りく推て今宵婚姻を整んと謀りしを外ふ笑くさも堪られず惠蘭の室に入るめいもの〻〻香く葱韮の園ふ憩ひの〻を臭氣を負ひたいもとおしかよて織れ家と知りつ今宵もあふ曉さんや主人いかく犯さうとも連れ去く通宵役高嶺を越てんさられあ〻盆九郎いその性究やく鄙各へらが月来止宿して用ひ菓子多あるふこれらの酬でまぐられそ沙金十兩ばかりを裹く留守ち老僕を召く〻の〻ち項日主人の厚義ゆありく毒瘡をうく愈しうば別を告んとゐひ。折のうつくて黙止さう夏の旅ハ夜てそよられハ今より辞し去べし。あ〻ひ還りあひあべこれ進らくゐひ孤といひ件の金を送し身を起えとしてれ。老僕ハ言と物を受くよ〻んゐ〻ちうんやあ〻北旨を言ふ〻ゐらればさ〻くふ辭を盡しく推制んと欲とれども義秀決して面ばたゐ縁頑ふたちゆく。草鞋の紐ゆ〻くく結ひ〻勢ひ已べ〻もあ〻ぎれば老僕ハ終よまぐあさふ送せ〻

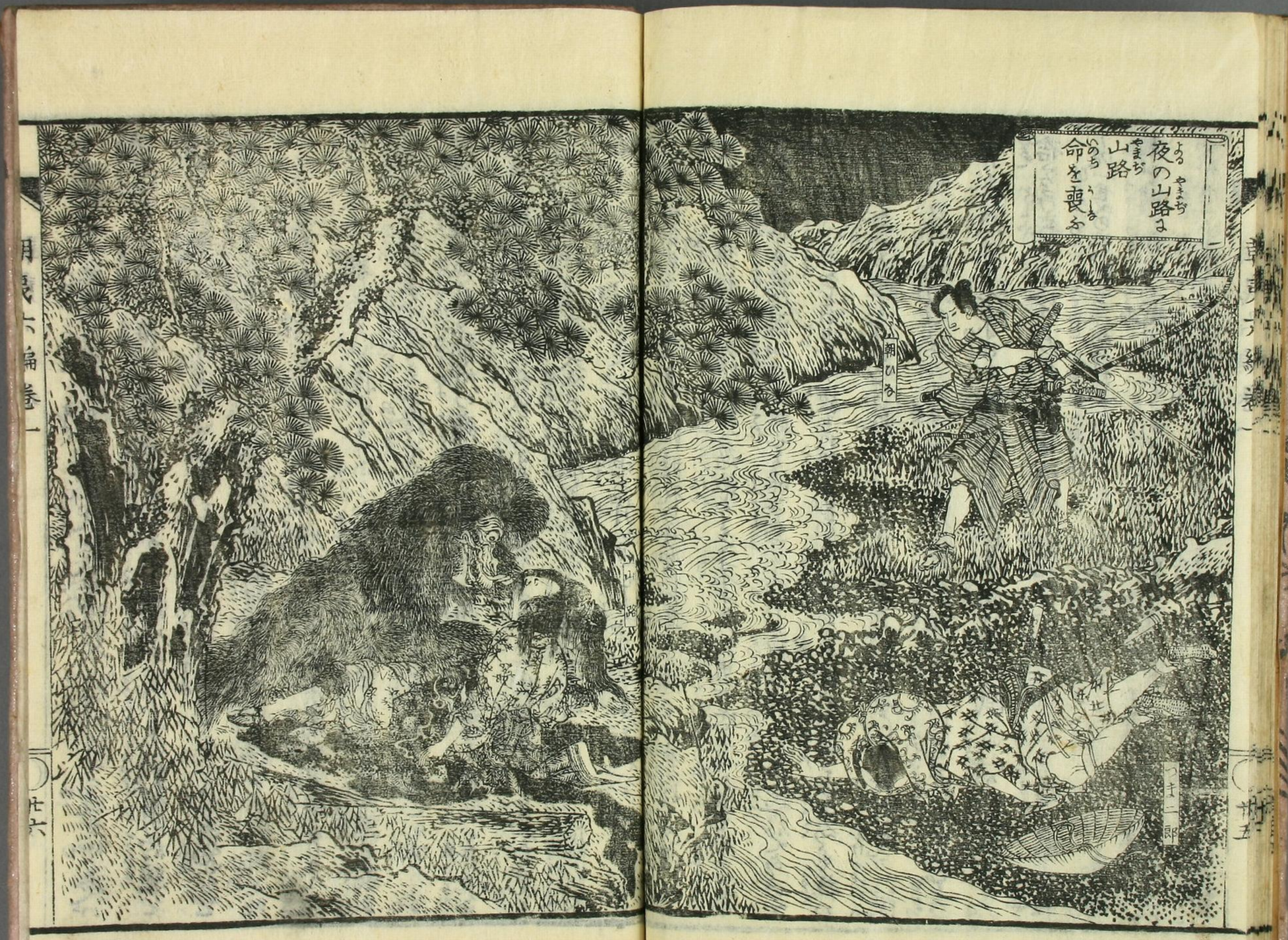
沙金を受あづりて續松両三束を贈りしゐば義秀ハその二束を鐵棒ふ結著その一束ふ火を移さて刀を取て腰ふ跨へ左ふ蕉火ゆり照らし右ふ棒を〻ち立く高嶺を指てと暗ち路を頻ふ急ぎうさる程ふ妻二郎ハ山路を扶掖つも黒白も別ぬ皐月暗を辿るくも落延く准備の草燈籠ふ火を移し路を照らしそその夜初夏の比及ゆ諏訪嶺ゆを攀登るさ〻ぬ〻ふ足弱の夜行し深山路へ急ぐとゆ〻ど動もれば推戻さ〻ゆ〻ば覺を歩行〻てと惱ゆる女を慰ゆつ又奬〻つ進む男も来ゆを〻ひ〻れば毛骨立く心ゆそさゆを弥ゆさる樹下低く山高く九折ゆる岨道を陟つ降つ幾遍とゆく跡ち久りて息を吻ち向上てゆ又急ぐゆ歩果敢とゆ〻ば挾夜の〻深くゆく峯上を踰て前面より来ゆ〻ゆ〻ば近くゆ隨火光ゆ〻ば人ゆあ〻鬼ゆゆ〻ん男とも女とも定ゆゆ〻ゆ〻ど逢の髪を素しゆる面ハ皺ゆて赤黑く身長四尺餘りゆ〻べし

もとより限りもなれど避んとすれば横路へ退んとすれば逼りて山路へさそ
妻二郎は食ふる弓箭もその甲斐なく身を縮めて共侶は樹蔭に寄らんとす
程なく彼妖怪は遽遭きぬふ山路を辛くと引綱を小脇に楚と引提て峯上を
北へ走るあれば妻二郎は吐嗟と叫ぶ怒りに堪ねばあるべしを忘るまじふ氣を
激しくいそしく草燈籠を樹の枝に掛置く弓に箭刻く弯んとすれば脱忽地
麻癬れて立もせんもぞ〜あるを朽をしと焦燥く帯に燈籠結下つ弓箭
弓箭を携へて何地まで〜と追蒐うれども妖怪は三反ばかり先に走りて
後方を見返りつつ徐々と行りやすを追蒐んとて喘々直と走るに近つけるとて九折
の処に造れば忽地に失ひぬ妻二郎は共侶を死をぞ契りし情人を妖怪に
掠攫れてこれのみ生て何かせん命を的に往方を索ねく生死をぞ〜くせさんやと
罵り狂ひ其処ともあらぬ深山を分入て南山路なる狼さへと頻るその名を

呼被れば彼方にも女子の声して遥に答ふるその名を呼被る疑べくもあらぬその人と
さて今宵迷れ〜とりも復さで〜たぐ〜に己んと思へば心に勇みあり力付
呼被ぶる声をあぐ〜に慕ひ〜けば廿六日の月出く夜なれば丑の半にあり辛
しく近つける前面に渓河横ふるあり樵夫のみかよふ路なれば常に獨木
橋を掛うり夏はあらの樹の上に山蛭のいと多くれば山蛭橋と呼ぶ縁を
る甲斐なく彼妖怪の所為なるべし橋を彼方へ引捨てれば渡べくもあらぬ
なれば山路は川を隔て〜と老る松の下に只ひとつのみうれども彼妖
怪は何地遁んか影もせねば契び勇む声をあり立てその橋を技掛るを南と
いそぐ〜山路へ〜を招ぐうも位の〜を起さ〜〜〜
松の樹わくをかけくとくれども腰立ぬ〜や竊に杪を指さ〜〜
と泣ゆう訴へ限りもなれば妻二郎はその指をあふく杪遥に向れば

彼妖怪は三四丈ある大杉の尻をうけて下る山路を疾視る眼の光凄しくて再視も
見ぬ程なる妻三郎は戰々兢々たる弓を取直して射る落さんとすれども腕麻れて
ぶつぶつと戛哩と落る弓と共に忽地撞と腰なる抜立ちにうり當下
件の妖怪は枝を素流々と下り来つ戰慄く泣く山路の頭髪を楚と引掴て仰
さまに推倒せば吐嗟と叫ぶ顔を久視く血を盛る盆の異なる口を張り唇を反して
ぐくと笑ふその為体は夜叉羅刹欲細の形様もかくやと山路を楚と押
へて右の胸前へ推當て垂水のごとく鋭爪の衣領の上より掛るごとく腹まで豁と
撥破れば衣はさらさら帯さへはらはらぜんと断離る程の皮肉は裂れ鳴尾骨摧けて
大腸小腸頭れ出流て鮮血は身も浮くばかり空を掴て苦む形勢限なく照も
鮮明の月さらさらよくよくそれが妻三郎は膽潰れ神去て遂に堪ぬ気絶
仰反てそが侭息は絶ぬ。

紫下某生再説朝夷三郎義秀はその夜二更の
比及ぶ諏訪嶺より攀登ぶ如法暗夜のうれしが峯に越せ小夜深くもあれども
迷ひもせん樵径欲とあれ延へ忽然とうるくまれば男女迷ふ
笑えり怪しき夜の深山路は誰をうれ子鳥ぬ彼婦と対夫と逃れてあるのを
過るとく山賊ぞと追れ欲をは誰かもあるも彼声の哀傷外は頭るを笑つも掠は
ぜて大丈夫とあるべ人をば鮮暁の月限
なく照らし溪川のほとりはまあり声をあるべぶ
ありくあるこれ紛べくもあるぬその面は豫て識る盃山が若黨くり
捨る弓箭の身はくあるこうあるべと晴を定め前面を結と度せいとも怪
丸一隻の悪獣女子の胸前撥破りそその血を吸んと以舌涎唇舐して且やや臓
腑を嚼まれ一つ心地よげぞうは笑ぶ是ん曩ぶ遍せ一隻の狐々は極まり捉
られ女子は盃九郎が玄兎山路をあれ淫奔遂ぶ命を喪ぶ只是不孝の冥罰歟


夜の山路は
山路
命を喪ふ
朝ひる
つき一郎

さるにつけ不便なるかな食ひ殺す獣の残害憎むべし一度いかでか逃えやと思へば怒り堪ぜず心頃りに早瀬なる橋を彼方へ引渡す川幅廣く流水急なり劉備の的驢を借らざれば輙く渡さんよすがいかで世事思ひ侘びて件の弓箭を引へりて忘れかねり是究竟と取揚て水際の樹蔭へ退き克雪固る程にあれ彼方へ山路の曽前へ走り出て著て血を吸ひ腸をうち啖ふその高味堪ぶるに又肩を交へ額のあらを掩ふ仰ぎ笑ひ矢声とりけて漂と射る寛違ひ額の真中肩さへ縫ひ通して鏃四五寸裏獣へ羽ぶるに逼とで立うる残酷無雙の悪獣窮所の痛痍ふ要時も勝ぜ四下へ響く苦痛の声と共に仰さまに倒るる義秀はあひのまふ悪獣を射とめ殺生せるとのあんと思へばうを投捨て鐵棒突立々々浅瀬を索ねく川源へ五七町起げば川幅狭き処あり丈餘ふ過ぎ難し水中へ背を顕せ大なる石さへあれば

鐵棒を小脇へ挾て岨より石へ石より前岸へ只二飛へ跳越て進みゆくこと両三町。

ちゃくも走り近つ寄て又鐵棒をもて彿々の吃を衝摧くあるりは強く當れば忽地頭を突断ぬ扨月光へ熟視ふ曩へ軽ふ二人ありこれを見形状大なる方へその壯ありとも見かれば雌雄ありとの世の風俗も空しからざるよ一頭を漏せしの遺憾く思ひ三十餘日荘官林へ抑留せられ甲斐ありて獨で言へて立在む程へ前面へ寄集合る人あり先ず一人憂を合へ声ありて浅江ぬ浅江主と呼かるを義秀遥へ見れば月の光と里人へ松の火光へ紛れ見て荘官皿山盆九郎ら里人へ近く来るを見て盆九郎へ恥る面色見て彼方へ寄へ小腰を折め面目も如浅江ぬ女児へ知られしあんこれは彼へを追留んこの山中へ入りて今ちゃくもあるまじく作れ妻二郎を見て見れば里人へ活きて綟の趣を咨問へ山路を妖怪へ捉られる且その横死の為体を報をそとて語く

此度は終に死絶う山路が横死は哀そを返すもわるざれど和殿は某を疎異に欲
別をくふ告げて夜を犯ゝ復この山を踰ゆをを心つまれること和殿はいかをく
この溪川を渡ゝゆへ女児の雙言を整れあん願ゆへ詳は知らゆをとゝは義秀些
擬議せば某は前日より辞ゝ去らんとひかども和主の在宿稀なれば意ゆをも黙止
せゝふ今宵の騒動ゆくふ忍びを留守せ老僕は愚意を示ゝ止宿醫療の酬
沙金一畏を送ゝうかゝて吳宅を辞ゝ去く又この山辺は迷ひをゝ遍
狐を財くこの今愛のあるも雖言を返ゝ本意は協へ今はゝも色あをこさとバくと
ひゝけく棒突立て遇んとをれば盆九郎は遠ゝく水際は魁を抗くゝよ侯ゆ浅江ゝ
和殿は曩日の働は國府はゆをえあけて鎌倉殿のをゝ知あり則その褒賞は越後殿の
衣一襲沙金五十両下されうをを府城より偽れを某きゆへ預り置り和殿はゆをを
報ざりゝは女児と婚姻整は宵は婚牽出はとゝ且く宿所は伴ん枉てゝ

渉を人と声高ゆふれば義秀眼を瞪らを尾陋ゝ盆九郎女児を餌はゝをれを生ゝと
蓬く計りゝ今宵推ゝ婚姻をゝ準備せゝ嫚侮る愚人の挙動女児の
横死をれゝ奥ゝ況某は賜ひ物を汝は婚牽出はるゝあゝんゆへ副妻は
ふ觸れゝそは終は送ゝ苗んかれ暁は女児の横死は不孝の冥罰汝は
地で子を喪ひは年来民は膏脂をを多の為を肥せゝ悪報をし病瘡あるを今まで
汝をゝ世は因果の道理を感悟ゝ私欲を塞ぐ民を憐れ縣は循吏あれは
猛虎は子を負ふく江を渡りゝ去りゝとあり毒魚の人を捉ゝその溪水は住をふを
譬は宋均は韓愈は善政は及ぶを或は山賊或は悪獄汝は配下は集合ゝこれその
奸詐の招く和天理寔は怕べゝ今さゝ鳥獸の侵入は告るは要あるをされども後の世までの
置土産はゝも驚さんゝくゝけこの地は抑留せゝれ比聊ゆをゝあれは浅江は豊六と名
告ゝは養父は象る假名ゝ四月中旬陸奥の役は平泉を攻ゝく賊首

経任を誅戮し、厨川に赴く。五百賊を屠りて、朝夷三郎平朝臣義秀、見て、こゝに友鶴と云ふ一妾あれども、これは色を愛でふ。邊土の卑職、目をうけて人の婿となるべき。

山路に死ぬべきも、又妻三郎と云ふ奸夫のことも、汝ら望ハ空華なんぬ。いまとを忘れて飽まで、警懲しと忽地に、深山路の繁に、一よ樹隠れて往方もなくぞ、ありにける。

盆九郎ハ義秀、ひ懲されのまゝ、捕てゆけハ、假名を朝夷ありと、初て知りそ、ひ、驚き、あきれ果て、里へハ共侶は忙然と、目送りの、天明て、流水よ、梁をそこ、山路妻三郎ハ、ぞ、殺、

莊宮ハ、昇ると、返しと、懇よ、葬、盆九郎、この下こ、話、さる程よ、義秀ハ、その、詰豆、行地を、下りそこの、宵ハ、新茂田よ、宿、投りつ、又、数十里の、路を、經て、同國、高田、越、三四日と、走りて、市振の、駅より、越中、ふ、入りて、泊、澤、あり、急ぐ、その、六月の、上、澤、稍、若神、ぞ、著、る、畢、竟、義秀、稲、向、許、詰、て、後の、物語、甚、麼、ぞ、次の、巻、解、分、ぞ、なんぞ、ん、。

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之一終

早稲田大学図書館
011888007417